

「3番テーブルの客」を巡る演出考

戸崎 春雄

映像学科

The Consideration about Direction of “Customer at Table Three”

Haruo TOZAKI

Department of Imaging Art

(Received October 15, 1997; Accepted January 30, 1998)

1. 企画誕生とTV状況

「台本が同じなら同じ作品が出来上がると思うなら、あなたはドラマを知らない」

これはH8年10月～H9年3月、フジテレビの深夜枠で放送されたドラマ「3番テーブルの客」の冒頭のコメントである。実質20分少々ミニドラマだが、毎回同じ脚本を違う演出家が担当するという、刺激的な企画であった。

このような競作は45年間のテレビの歴史に於いて曾てなかった。勿論、映画界にも見当たらない。何度も映画化されている「四谷怪談」「伊豆の踊り子」「雪国」などは夫々脚本が違うか、同一脚本であっても時間が隔たっていた。1951年東宝と松竹で同時に封切られて話題になった「自由学校」も脚本は異なっていた。

◆演劇界に於いては、H8年斎藤憐の戯曲「零(こぼれる果実)」を蜷川幸雄と佐藤信の演出家が夫々俳優、装置を変えて連続公演し、話題をまいた。

さて、テレビドラマは過去、D(ディレクター)が企画、脚本、配役を含めた、制作現場に於ける最終的な決定権を持っていた。80年代中頃から、そうした「ディレクター中心主義」が揺らいでP(プロデューサー)が決定権を行使する、所謂Pシステムが確立してきた。DはPの決定したルールの上で職務を実践している一つのパートになる。まして放送界のマンネリ状況の今日、同じ傾向のドラマ氾濫の中で、“Dの顔を見せる”事が困難になり、一般視聴者のDへの注目度は低下せざるを得なくなっている。この状況は演出のマンネリ化にも無関係ではない筈だ。

しかし、テレビドラマはニュースと共にテレビ局のステータスを決める看板ジャンルとなっている。それにしても、作品の鍵を握るDの不当にも低い評価に首を傾げ

る関係者も多い。

フジテレビの編成は、この様な状況を憂慮し、Dへの注目を高めると共にD自身の自覚と奮起を促し、パワーを回復させる方法として、同一脚本による演出家競作を発想し、「3番テーブルの客」の企画を誕生させた。同時に演出家であるならば、“自分の個性を遺憾なく発揮してみろ”という挑発的な意味も十分ある。

果たして、演出によって本当に作品が変わるのか、変わるとすれば具体的にどれ位変わるのか、検証してみたい。

2. 制作条件と競作の見所

さて、「3番テーブルの客」を制作するに当たって各担当者に示された制作条件は

- (1) 同一脚本(三谷幸喜脚本)で制作する。
- (2) 低予算の為(通常のドラマ予算の十分の一)撮影日数2日。スタジオセットは使用せず、実在のレストランなどを利用してのオールロケ撮影。編集1日、MA1日。
- (3) 演出家の力量を発揮できるように、細かい制作条件はつけない。

*制作予算は約300万

脚本の改定、設定の変更も有りという、かなりのフリーサイズであった。フリーであればある程、演出家の手腕発揮の場が広がるのだが、苦悩も増大する。

演出家にとっては→通常の制作と違って、作品を比較して観られる為、負けられまいとする演出力の競合精神が火花を散らす。また少制作費の為、キャスト・美術道具・制作日数の制限が多くなるが、そこを如何にカバーするかが演出家の腕の見せ所になる。

俳優にとっても→演技が比較検討され、緊張を強いられるが、演じ甲斐も膨らむと同時に芸の幅も出てくる。視聴者にとっては→通常のストーリー追求よりも演出・

演技の比較に関心が移り、演出家の発想の相違や演出の重要性にも興味が及ぶ。

3. ストーリー

歌の世界で活躍したいと思っている中年の男が夢果たせず、現在は或るカフェ (or レストラン) でウェーターをしている。そこへ別れた妻が客として現れる。慌てた男は見栄を張って客になりすまし、今は成功しバンドマスターとして活躍しており、今日も向かいのホールで歌手ビビ萩原 (ポスターにあった名前を借用しただけ、顔も知らない) の演奏があると嘘をつく。

しかし、成功していたのは妻の方で (ビビ萩原その人だった)、コンサートに出演する前カフェに寄った次第。男は更に、CDを出す計画があり、ビビが音楽プロデューサーに推薦してくれたと嘘を重ねていく。嘘と知りつつ話を合わせる女。そこへ楽器を持った男達が茶を飲みに来るので仕方なく「バンド仲間に挨拶してくる」と近寄ってゆく。“バンマスである事”を女に見せようとする、男の空しいポーズであった。更にコンサートの大物歌手も現れ、女の正体が明かされそうになったりのハラハラ、ドキドキをすり抜けて二人の心の機微がユーモラスに、またチョッピリ哀しく描かれていく。

4. 演出家 (24人) の分類

「3番テーブルの客」は24人の演出家で競作された。

◆テレビ関係→13名

〔ドラマディレクター 12名〕
〔バラエティディレクター 1名〕

◆映画監督 → 5名 ◆タレント→1名

◆舞台演出家→3名 ◆外人 →1名

◆CM演出家→1名

これを、一覧表にまとめると、

回数	演出家	男	女
1	河野圭太(TVディレクター)	生瀬勝久	鳥越まり
	代表作「振り返れば奴がいる」「王様のレストラン」「警部補・古畑任三郎」		
2	小田切成明(TVディレクター)	桑名正博	かたせ梨乃
	「ガラスの壁」「春がくるまでに」「明るい家族計画」		
3	岩本仁志(TVディレクター)	阿南健治	水島かおり
	「夏子の酒」「白線ながし」「ナースのお仕事」		
4	片岡 K(TVディレクター)	田口トモロヲ	鈴木保奈美
	「世にも奇妙な物語・のどが渇く」「恐い女シリーズ・殴る女」「いとしの未来ちゃん」		
5	若松節朗(TVディレクター)	井上順	洞口依子
	「振り返れば奴がいる」「お金がない!」「それが答えだ」		
6	藤田明二(TVディレクター)	伊武雅刀	佐藤友美
	「ニューヨーク恋物語」「過ぎし日のセレナーデ」「ヴァンサンカン・結婚」		

7	福本義人(TVディレクター)	高橋克実	美保純
	「OL3人旅シリーズ」「金田一耕助シリーズ」		
8	井筒和幸(映画監督)	今井雅之	川上麻衣子
	「ガキ帝国」「二代目はクリスチャン」「岸和田少年愚連隊」		
9	石坂理江子(TVディレクター)	尾藤イサオ	伊佐山ひろ子
	「素顔のままで」「Age, 35恋しくて」「こんな私に誰がした」		
10	中江 功(TVディレクター)	ベンガル	黒田福美
	「ピュア」「翼をください」「おいしい関係」		
11	杉田成道(TVディレクター)	上杉祥三	桃井かおり
	「北の国からシリーズ」「並木家の人々」映画→「優駿」		
12	鈴木雅之(TVディレクター)	白井晃	とよた真帆
	「29歳のクリスマス」「王様のレストラン」「ロングバケーション」		
13	岡村俊一(映画監督)	柳葉敏郎	藤谷美和子
	「代紋 TAKE 2」「怪談にせ皿屋敷」「スーパースキャンダル」		
14	中島信也(CMディレクター)	近藤 武吉	村松恭子
	CM→「フジテレビ/哲学」「日清カップヌードル・原始人シリーズ」映画→「ウルトラマンゼアス」		
15	木梨憲武(タレント)	木梨憲武	石井苗子
16	伊丹十三(映画監督)	布施博	川中美幸
	「お葬式」「マルサの女」「マルタイの女」		
17	三宅憲介(バラエティ・ディレクター)	小堺一機	千堂あきほ
	「おれたちひょうきん族」「あっぱれさんま大先生」		
18	松岡錠司(映画監督)	筒井道隆	緒川たまき
	「バタアシ金魚」「トイレの花子さん」		
19	星 護(TVディレクター)	草刈正雄	石富由美子
	「じゃじゃ馬ならし」「いい人」「世にも奇妙な物語・壁の小説、望みの夢」		
20	和田 誠(映画監督・イラストレーター)	小日向文世	北村岳子
	「麻雀放浪記」「怪盗ルビィ」「怖がる人々」		
21	中村育二(舞台演出家)	中村育二	かとうかずこ
	舞台「空き室有り!」「年中無休!」		
22	スティーブンローゼンフィールド	キースミドルトン	トニーミドルトン
	「Woyzeck」「Arms and the Man」		
23	山田和也(舞台演出家)	西村雅彦	黒木瞳
	舞台「巖流島」「笑の大学」		
24	嶋川幸雄(舞台演出家)	宇崎竜堂	樋口可南子
	舞台「近松心中物語」「ハムレット」「女王メディア」「身毒丸」映画「魔性の夏」		

5. 24作品中の3人の演出家

24作品は夫々個性が出ていたが、完成度に関してはかなり幅があった。

TVディレクターの作品は皆脚本に忠実で、各氏の力量が十分発揮されて味わいある、気迫のこもった仕上がりになっていたのに対して、映画監督陣は脚本・設定を変えて (フジテレビ・小岩井プロデューサーの言「台本を一字一句直さない

ことなどの制約はあえて課さなかった。ただ、大幅に台本に手を入れた場合、三谷幸喜脚本というクレジットは入れない、という風にしました)制作したが、バラツキがあって意欲が空回りしている印象の作品もあった。

今回は全24作品の中から、意欲的で完成度の高かった3作品を重点的に取り上げたいと思う。

◎片岡 K (1964年生まれ) 作品

ロフトを改造したスモーキーな、不思議な空間。メタリックで、広すぎるほどの四角い箱には冷えた空気が充満していて、まるで異次元な空間を思わせる。

他の多くの演出家は実在のカフェをロケ現場にして、都市の日常風景の中で「3番テーブルの客」というシチュエーションドラマを演出したが、片岡はあくまで非日常的な、無気質な、倦怠感の充満した空間を選ぶ。このような空間にはホットな感情はなじまない。はたして、やがて登場する女(鈴木保奈美)の表情には虚ろで生活の匂いが感じられない。男(田口トモロヲ)との再会にも、懐かしさやほろ苦さの感情が見られず、ドラマの前半では事務的とも思える会話が繰り返される。結婚して甘い時間を共有した二人とは思えない程だ。

店の同僚(野村祐人)の演技もリアルでない。サービスを業務にしているウェ이터だが、客に飲み物を置く仕種も乱暴この上ないし、客前で体をひねって、準備体操的なアクションまでしてしまい、レシートを口にくわえたりもする。言葉使いも相当ひどい。低音で「はい、レモンティーね」「アリガトウございやすした」は、まるで居酒屋感覚だ。しかし不思議な程嫌悪

感がない。片岡は、この同僚の描写には、かなりのウエイトを置き、男との会話や仕種にも愛嬌あるキャラクターが出て、片岡風“おかしな二人”になっていた。

後半に登場するバンド仲間も意表をつくキャストで(オナベツツ)、飾り立てた衣装はまるでショウそのものだ。

衣装といえば、男二人の白いエスニックな衣装も大変ユニークだし、後半に出てくる大物歌手(岡田真澄)の黒ずくめにグレー毛皮のショートジャケットの服装、赤い口ひげも特徴的であった。

この作品で片岡は、常識・リアル・ホットな感情を一切排除して、片岡ワールドとも言える無機質な、クールな、非日常的なタッチで意識的に表現した。

片岡は初期、「世界の車窓から」「音効さん」「文学と言フ事」などの非ドラマ系番組を担当した後、ドラマのADを経験することなくドラマを演出するようになるが、ドラマの通念に捕らわれない、個性的な思考が満溢していて、全編クールでユニークな雰囲気が漂い、観る者を不思議な魅力の虜(トリコ)にさせ、24作品中、最もドライでクールな味付けながら、非常に優れた魅力的な作品に仕上がった。

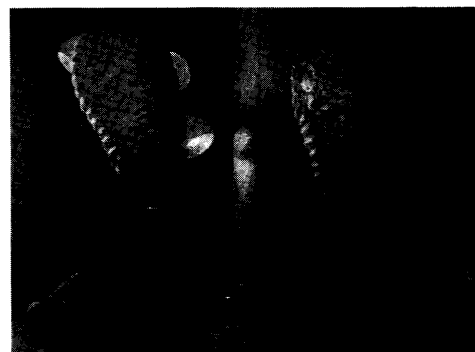
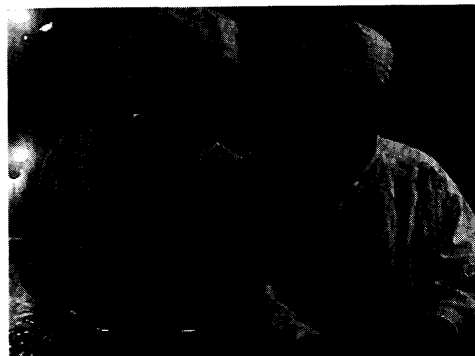
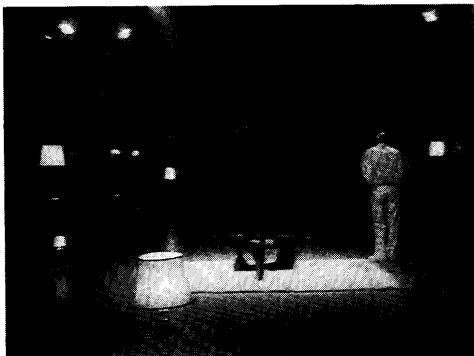
最後の片岡のコメント「おそれいったか、凡人ども」にも彼独特の表現が出て興味深い。

◆作品のキーワード……クール、ワイルド、非日常

◎星 護 (1958年生まれ) 作品

全作品の中で唯一のミュージカルである。

演出の星は音楽に大変関心があり、特にオーケストラ音楽を



好み、音楽打合わせでも具体的に細かく意図を伝え、音楽効果大の映像に仕上げていく。

作曲家本間勇輔（ドラマ「警部補・古畑任三郎」の作曲家）との出会いが（星が担当した、古畑シリーズの笑福亭鶴瓶主演「殺しのファックス」）彼の更なる飛躍にプラスした。それ以降、彼の作品の音楽は「世にも奇妙な物語」を除いて殆ど本間が担当している。「明智小五郎シリーズ」「勝利の女神」「いいひと」などである。ミュージカルは日本ではなかなか育たないと言われている。お金がかかる、時間がかかる、歌えて演技の出来る俳優の不足などがその主な理由であろうが、制作回転の早いTVの世界では全くムリな話になってしまう。

星は予算のない、時間のない「3番テーブルの客」で無謀とも思えるミュージカルに挑戦した事は特筆すべき事であった。金銭度外視で、星と本間の両氏は、友情と創作意欲で“バタクさくない”“外国っぽい”作品目指して立ち向かったのである。

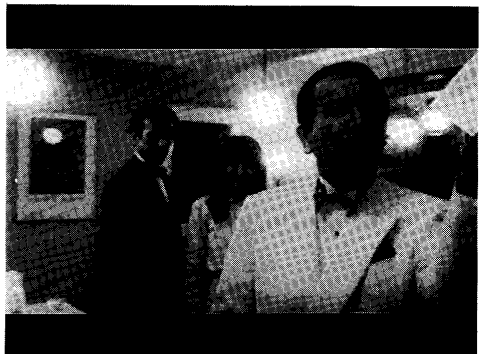
二人の努力は見事に結実し、傑作が誕生した。テンポあり、ユーモアあり、優れた映像あり、シャープなカットインあり、動的なカメラワークありで非常に楽しめる“お洒落な”ミュージカルになった。全編イエロー色の映像も作品のムードにマッチしており、時折見せるスロー、ハイスピードの映像も良いリズムを生み出し、男がクルクル回る動きがスピード感を生み、非常に効果的であった。

作品では、先ずピアノの鍵盤と弾く指の俯瞰ショットに次いでピアノを弾く男（草刈正雄）の上半身が映り、何回かカットバックした後、テーブルの平面上を盛んに動かしている指のアップになる。実は、男はテーブルをピアノに見立てて店内の音楽に合わせて指演奏していたのだ。ピアニストを夢見て果たせない男の姿がクッキリ見えてくる上手い導入部である。間もなく店は混んできて男も忙しくなる。ここでハイスピードのクルクル回りの映像が大効果を発揮する。

やがて、女（石富由美子、中堅のミュージカル歌手でTVでは馴染みが無かったが、大変フレッシュで素直な演技に好感が持てた）が入って来ると、男は女に気づかれぬ為の慌てたアクション・表情が音楽にうまく乗って、笑わせてくれる。

三人のバンドマンが来るシーンも秀逸である。軽快な音楽に乗って入って来る三人の歩みがテンポよく揃い、座席に着くや「♪スミマセーン」「♪スミマセーン」「♪スミマセーン」と三人が次々と歌いながら片手をおもむろに挙げるアクションが微笑ましい限り。続いてやって来る大物歌手（村井国夫）も、歩く靴のアップではツーステップが交じったりして演出家のこだわりが見える。酔っ払いの客（ドン貫太郎）もミュージカルに相応しい気のいいキャラクターが光る。

時々コーラスになる「A night to remember 記念すべき夜」の歌声がミュージカルの雰囲気を一層盛り上げてくれる。また、劇中で随所に出てくる芝居の間のところは、音楽もポー



ズがあり、緩急のメリハリがうまく計算されているのを感じた。これは作曲家との綿密な打ち合わせと、練り込んだ演出プランの成果に他ならない。いずれにしても、主演の男女をはじめ、出演者全員が非常に楽しく演じ、大変魅力的な作品になった。

星は制作日数の少ない、その上ミュージカル作品に対して、敢えてカットを細かく割った（全部で367カット→1カット平均3.25秒）。通常カット数が多いほど、編集時間がかかるが、星は3カメラでパラ撮影し、3映像を映しながらアビット編集して、編集時間を短縮した。この様に非常に手の込んだ作品を制作2日（実際は22時間）という厳しい条件の中で挑戦した演出家とスタッフに大拍手を送りたい。

なお、この作品では上下を切って、横長の映像にし、映画風にしていく。

◆作品のキーワード……台詞を歌う、踊らない、パリ風

◎蜷川幸雄 (1935年生まれ) 作品

日本を代表する、そして世界的にも有名な演出家である蜷川が、深夜番組のミニドラマを演出する事に大きな喜びを感じた。

元々、俳優を志していた氏は映画や TV の現場にも精通していた。それにしても今回の TV 作品では舞台上で見せる華麗でケレンたっぷりの演出手腕をどう見せてくれるか期待が膨らみ、放送が大いに待たれたが、期待以上の満足感を与えてくれた。

トップはソフトフォーカスで揺れるネオンのアップが映し出され、カメラが移動して二階の人物を捉え、ラセン階段を降りて来るのをずーっとフォローしてくる、51秒のカットで始まる。

このようにカメラワークが動的でテンポがあり、映像のキリリも大変 TV 的であり、二人 (宇崎竜童、樋口可南子) の微妙な関係 (元夫婦であり、見栄の嘘をつく男とそれを知らぬ振りをする女) が的確に描かれていく。ハッキリした蜷川演出を感じるのは、カフェ店内の天井から吊られている多くのネオン、それがよく揺れるのだ。揺れて自信の無い男の気持を象徴するかの様に見えて、非常に良い映像効果を出し、両隅に飾ってある二対の人体図 (男女夫々の裸体と骸骨図→本音とたてまえ或いは人生の表裏を象徴している様に見える) と共に蜷川演出の色合いが遺憾なく発揮されていた。

蜷川は大いに TV を意識して高低のカメラの切り返しを試み、フラットな画面にならないように努めた。時には1.5秒の大俯瞰ショットを挿入して人物の位置関係を示す技法は通常では考えられない (3~4秒が普通である)。このように、舞台



でみせる動的演出 (俳優の動きある演技、光線の動きある演出、ハットさせる舞台転換、水・紙吹雪などの効果的演出、音響効果による演出 etc) をこの作品ではカメラワークとネオンの動きで見せた。

人物の描き方にもベテランの冴えが光る。元夫婦の微妙な男女の感情が、24作品の中で一番的確に出ている。二人の話している時の表情、相手を見る目、仕種がいい。特に二人の笑い声 (台詞の途中や終わりに笑い声を多用している) には台詞では表現出来ない、そして台詞以上の効果が出た。宇崎の意図的な笑い声などは時には「ごまかし」、時には「相槌」、「連帯」と使い分け、男の狡さがハッキリと出た。受ける樋口も、宇崎の調子に合わせて、微笑み、時には、声高く笑いベテラン二人の演技も冴える。女が時々、男の方に手を差し出す演技をするが、母親が子供のヤンチャプリに思わず手を出す母性愛に似て非常にホット、ストレートで「二人は愛していたんだな」と実感できる元夫婦の年輪を感じさせた。その顕著に現れるのが二人の別れの時である。

男「……お前、頑張れよ」

と、拳を出し、強く振って勇気づける様に言う。

女「ありがとう」

と、女も拳を出し同じアクションをしてから、その拳を男の胸に押し付けて

女「あなたもね」

男「俺は頑張ってるんだよ」

二人笑い合う。

と、女が急に男の頬にキスをする。

女「じゃあね」

男が拳を開く。

女、男の手に自分の手を重ね合わせ、出て行く。

途中、飛び上がってネオンを揺らす。

揺れるネオン。

台詞の部分だけが原本にあり、ト書きの部分は蜷川演出である。中年同士の俳優が演じたこのシーンは、嘘をつき見栄をはる男とそれを知らないながら話を合わせる女の関係だけでなく、今後“生きる”為の色々な苦勞や諸々の事すべてに



対して互いにエールを交わしている二人に見えてくる。また、女の去った後の、男の見せる哀愁に満ちた顔が非常に印象的である。先程笑い声をたてた者とはまるで別人格なのだ。ふと、「人生」という言葉をズシリと感じさせるシーンになっていた。

蜷川作品は「3番テーブルの客」シリーズ最後にふさわしい、堂々とした、完成度の高いドラマになっていて、大いに堪能することが出来た。

◆作品のキーワード……ゆるるネオン、人生、笑い声

6. 他の作品について

この項では、他の21作品について簡単に触れておく。

(a) テレビディレクター→11作品

テレビディレクターの多くは与えられたシナリオを如何に映像化する事から始まり、シナリオ作成からは入らない。今回も、殆どのディレクターが三谷幸喜脚本を忠実に（部分的な変更はあり）扱っているので、破綻は少なく、水準を抜く作品が多かった。

三谷作品の多くを演出している河野圭太（1回目）、鈴木雅之（12回目）はシナリオを忠実、且つ的確に読み、演出のツボを心得た軽快な作品に仕上げた。

河野は“雨の降る夜”（原本では“例えば、外は夜”となっている）にして、ムーディーな雰囲気を出すと同時に男の心中を表現している様にも見せて非常に効果的であった。

鈴木はコメディのリズムを巧みに掴み、タイト、ルーズのショットを程よく交ぜながら、ナメショットを一切使わず、真正面ショットの短い切り返しを積み重ねてテンポ良い作品に仕上げた。

小田切成明（2回目）、若松節朗（5回目）、藤田明二（6回目）、福本義人（7回目）は共にベテランのディレクターであるが、夫々味わいある作品にした。

小田切は、24人の演出家中、一番の長老（62歳）であるが、細部でその腕を発揮した。主役の二人に年配俳優（桑名正博、かたせ梨乃）を選び、タバコを巧みに利用して元夫婦の年輪を明確に出し、ミラーショットを計算に入れたカットティングは映像に深みを出し、落ち着いたある大人の作品に仕上げた。

若松はしっとりとしたムーディーな作品作りに徹した。短いアバンに続くタイトルバックで結婚当時の幸せだった日々を優れた映像で見せ、現在との落差をハッキリ示した導入部は効果的であり、印象的であった。現実に戻ると、周りの照明を落として主役だけを際立たせ、更にムードある音楽で二人の世界を優しく盛り上げて、演出家の狙いが十分伝わって来た。

藤田作品は劇場の舞台にセットを組み、20分のドラマを4カ

ット（23秒のタイトル、34秒、3分35秒、15分28秒）で見せた。店内→調理場→外を1カットで横断していく。時にはカメラが動かず、回り舞台が回転して、座ったままで人物がカメラ前に来る手法は面白かった。ただディテールの表現が欠落するという長まわしの欠点を、この作品も負わざるを得なかったが、この様なトライ精神を大いに評価したい。

2時間ミステリーの巨匠と言われている福本は職人的うまさで定評のある人だが、期待通りコミックタッチで明るく軽快な作品に仕上げた。が、ポイントの箇所ではペースの味付けを決して忘れないのは流石であった。

岩本仁志（3回目）、石坂理江子（9回目）、中江功（10回目）の若手グループは、淡泊な作品とコクのある作品に分かれた。

岩本（24人中、最年少の32歳）作品で、主役の男女が夫々思い出の写真（子供の写った3ショット）を取り出して見るカットがある。今でも忘れていない気持ちを端的に表現したかったのだろうが、安易な写真使用にみえた。都合良すぎるのだ。二人が互いにどう思っているのかを簡単に「もの」で説明するのではなく、「ここらドラマ」で示して欲しい。心理描写というドラマのメインディッシュをインスタント食品ですまされてしまった感じがした。

石坂はカメラ VX1.000を使用し、粒子の粗いセピア風映像で勝負した。手持ちカメラによる揺れが良い効果を生み、シャンソンの歌声が郷愁を誘う。店内を多くの客で埋め、その混雑の中でドラマを進行させ、リアル感溢れる作品になった。

中江も VX1.000を使用。12月23日放送の為、「クリスマス」設定にして、二人に愛が復活するという最良のプレゼントが与えられるハッピーエンドドラマに仕立てたが、出来過ぎの感じがした。

杉田成道（11回目）作品は、正月特別編として60分拡大版の為、三谷脚本は使用せず、「3番テーブルの客」が作られていく過程そのものをドラマにし、シナリオも本人が書いた。

舞台初日が迫っている劇団稽古場で、演出家が新人の演技に怒声を張り上げたり、設定を次々と変えて（3倍速で演じる、台詞を全てアイウエオにする、嵐の吹き荒れる船中にするなど）演じさせている。手元にある脚本は一部分で、次の脚本が来るまでの時間を稼いでるのだ。

実験的作品にはなったが、「3番テーブルの客」の競作には入らない番外編になっている。

バラエティ番組のベテラン・三宅恵介（17回目）は随所にギャグと笑いを仕掛けた。3メートルもの長いメニューがあったり、男（小堺一機）が顔隠しの為お面をかぶったり、困って首を傾げると看板も同様に傾いたり、果ては小堺が二役で和服の娘や古畑任三郎に扮したりする。バラエティを意識しての演

出であろうが、本来のドラマのユーモアとペースが忘れ去られる結果となる。もっとギャグを押さえて、リアルに作っても十分笑える作品になり得た。

以上がテレビディレクター作品だが、その殆どが音楽を効果的に使用している。(映画監督作品では感じられなかった点である)。特に、河野、小田切、若松、石坂、鈴木等の作品にそれを感じたが、中でも鈴木作品は秀逸であった。この功績の陰に、選曲者(大貫悦男)の存在を忘れてはならない。選曲の良さ・挿入するタイミングの良さは抜群であった。良い曲はドラマに命を与え、弾みをつけてくれる好例である。

(b) 映画監督→5名

前述したが映画監督は、テレビディレクターに比してシナリオや設定を変える事が多い。(シナリオ執筆が映画監督の必須条件であれば当然の事だが)今回も殆どの監督が自分色の「3番テーブルの客」を創り上げた。

井筒和幸(8回目)はシナリオこそ変えないが、井筒カラーを随所に出し、アンチ三谷風な色彩が最も濃い作品になった。

先ず男(今井雅之)の関西弁で始まり、全体をコッテリ味で貫く。更に、重く、猥雑的なムードさえ感じさせる。女と大物歌手が愛する関係にあると匂わせる作品は幾つかあったが、井筒は二人の関係を濃厚に着色して見せた。結果、24作中随一の異色作になった。

岡村俊一(13回目)はシナリオを大幅に変えながら(男を衛生具販売員、女を新人女優)、ポイントの台詞は忠実に活かして、まとまりのある作品に仕上げたが、原本と比較してユーモラス度は半減し、ドラマの味わいも薄くなった。

伊丹十三(16回目)作品は、オーナー(宝田明)が足負傷の為、店内にリモートカメラを設置し、自宅にいながら店を監視するという設定だが、伊丹監督らしい発想で面白い。しかし、カメラに映った男と女の再会から別れまでを覗き見るオーナーと娘(小学生)の無責任な会話が男女のドラマを中断する。娘の口から出る大人びたヤジ馬発言、「貧乏人じゃん」「渋いよ、コイツ」「複雑な人生を垣間見てしまったんだ」に驚かされ、それもタバコを吸いながらなので(終わりで本物のタバコでない事を断っている)、男女のドラマに感情移入したくても出来ない結果になる。男女のドラマ、父 娘のドラマ、どちらにウエイトを置いているのかもハッキリしない。何れにしても中途半端になり、ユニークな設定も不発に終わった感がある。伊丹は“覗き見の面白さ”を描きたかったのかも知れない。しかし、“覗き見”は描けたが“面白さ”は描けなかった。

松岡錠司(18回目)は主役の年齢を一番若く設定し、シナリオを大幅に変え、恋愛ドラマに仕上げた。モノクロ映像で終始し、描き方は一貫して深刻で重い。重過ぎる。若者の爽やかさも無い。原本とは全く違うムードの作品になった。

和田誠(20回目)は5名の監督中、唯一人三谷脚本をそのまま忠実に映像化した。台詞や感情表現も極端な程モノトーンに押さえた演出だが、非常にリアル感が出た。また、主役の男女は24作中、最も純朴で誠実な人物に描かれていて好感が持てた。店内の壁に飾られた多くのポスターは全部、和田作品でちょっとしたギャラリー気分になれたのも楽しかった。

(c) 舞台演出家→2名

落ちこぼれ気味の男の日常を得意ネタにする、男6人の劇団「カクスコ」の演出家・中村育二(21回目)は、得意のコーラスが歌える設定に脚本を変え、「3番テーブルの客」コーラス入りの庶民版を作りあげた。ただ、男(中村が演じている)のヒゲに貫録があり、窮地に追い込まれる感じが薄かった。

劇団「東京サンシャインボーイズ」結成から三谷幸喜と行動を共にし、「笑の大学」「君となら」など多くの名舞台を演出して来た山田和也(23回目)は原本に忠実に接し、正攻法の演出で押し通したが、テレビ初演出の所為か、大人しい無難な作りになってしまった。三谷脚本を知り尽くしている山田には、もっと個性的な味付けを期待していたのだが……。

(d) CM ディレクター→1名

中島信也(14回目)作品はCM ディレクターらしくCM(ビビ萩原新春コンサートPR)で始まり、CMで終わる構成をとり、劇団新宿梁山泊の全面協力のもと舞台形式で進行するが、舞台演技過ぎてリアルさに欠け、ユーモラスな味も感じられず、映像もフラットで舞台中継風に終始した。ラストはビビ萩原中心に多人数のサンバダンスショーが2'37"も続くがドラマ部分にもっと時間を割くべきであった。

(e) その他→2名

監督・主演を兼ねた木梨憲武(15回目)は面白くさせる為にかット数を多くし、キメ細かく撮る努力をした。が、木梨の演技が過剰気味でリアルさが薄くなり、女(石井苗子)の時々見せるシラケの表情にも表現過多が見られた。とは言え、まとまった作品を完成させた木梨の頑張りには拍手を送りたい。

スティーブン ローゼンフィールド(22回目)はニューヨーカーを都会的センスでコミカル且つ、シニカルに描く事を得意にする51歳の演出家。今回の作品は、ペアーで歌っている夫婦の女の方が売れ出し、男を捨てて飛び出す、男を忘れられず戻って来る。ところが、今度は男が逃げ出して行くストーリーをコメディ仕立てにしている。しかし、「3番テーブルの客」の設定から離れ過ぎて、この競作シリーズには入りにくい作品である。

7. 結 び

24本の「3番テーブルの客」の演出家たちは厳しい制作条

件の中で、夫々が力作・傑作・異色作を提供した。冒頭で提示した「一本の脚本が演出によって本当に変わるのか、変わるとすればどれ位変わるのか」の検証は、本当に変わると確認出来たと共に、一本の脚本から、これ程バラエティの富んだ作品が生まれた事に驚きを感じた。ここでは演出が大手を振って大通りを疾走した。しかし、現実を考えると、曾てのディレクター中心主義に戻る可能性は少ないし、番組は「作品」である前に「商品」と主張するプロデューサー・システムの流れは当分変わらない。とすれば、世の演出家達はプロデューサーから与えられたレールの上に胡座をかくのを止めて、もっともっと「燃焼し」「火花を散らし」「挑戦し」「商品であり、作品でもある」番組を大胆に制作していく姿勢が、今こそ必要なのではないか。いや、ディレクター対プロデューサーだけの狭い問題としてではなく、放送界全体の今後の問題として真剣に考えねばならぬ問題である。

現在、大衆のテレビ離れは大きい。趣味趣向の多様性が一因でもあろうが、限られた出演者を同じような企画で奪い合っ

ている“井の中の蛙”競争ではジリ貧以外、何も生まれない。今後、ますます映像の世界は広がり、ハード面においても新技術時代に突入して行く今日、その一端を担う放送関係者が現実の変化に対応せず、新しい革袋に相応しい酒を創らなければ、20世紀の遺物で終わってしまうかも知れない。その意味においても、「3番テーブルの客」の様な演出家を刺激し、奮い立たせる好企画が今後続出し、もっと多くの演出家が枠を超えて参加し、競争出来る場がどんどん広がる事を強く、強く願いたい。

参考文献

- 放送文化 (97年5月号) 「もっともっとまともなドラマが見たい!」文・高橋孝輝
 GALAC (97年8月号) 「90年代を生きる映像作家たち片岡 K」文・こうたきてつや
 シナリオ教室 (97年9月号) 「“3番テーブルの客”の演出」文・中江功